

## 中上健次『地の果て 至上の時』論

——真の秋幸の物語の始動——

佐藤綾佳

はじめに

秋幸サーガとは『岬』（『文学界』、一九七五年十月）、『枯木灘』（『文芸』、一九七六年十月～七七年三月）、『鳳仙花』（『東京新聞』、一九七九年四月十五日～十月十六日）、『地の果て 至上の時』（書き下ろし、新潮社、一九八三年）、『奇蹟<sup>1</sup>』（『朝日ジャーナル』、一九八七年一月・九日合併号～八八年十二月十六日号）から成る、秋幸が生まれ姿を消すまでを描いた神話群である。その中でも、秋幸を主人公とした『岬』『枯木灘』『地の果て 至上の時』（以下、『地の果て』と表記）の三作は強い凝集力のもと、秋幸が荒ぶる神・スサノオのごとく繰り返し与えられる試練を乗り越え、成長するという神話的構造の基に成立している<sup>2</sup>。その過程で、兄・郁男の呪縛にとらわれていた秋幸は、実父・浜村龍造と対峙できるまでに成長を遂げてきた。だが、これは同時に秋幸が龍

造に呪縛されることを意味するのだ。

『地の果て』は『父殺し』という主要テーマに「水の信心」、「路地跡」の二つのテーマが絡みつく形で構成されている。従来、『地の果て』における浜村龍造の自殺は秋幸の『父殺し』の失敗であると論じられている。だが、論者は『父殺し』は成功していると考える。『岬』での近親相姦、『枯木灘』での異母弟殺害という通過儀礼を果たし、内に潜めていた邪悪な力を開花させた彼に残された最後の試練こそ『父殺し』であるからだ。そして、『父殺し』を成し、龍造を超えた秋幸の業火によって悪しき「路地」を浄化し、秋幸サーガは円環を閉じるのだ。

本稿では、試練を乗り越えることで次第に強く存在を主張するようになった邪悪な部分「秋幸の「影」が、彼を『父殺し』へと導いて行く有り様を跡付けることで、『地の果て』の読み直しを行う。

### 一、消滅した「新宮」という聖なるトポス

秋幸が服役している三年の間に、聖なる地であった「新宮」は、紀伊半島を一周する高速道路の建設が始まったため資本主義のシステムが流入し、俗化した。「新宮」の変化を受け入れ切れない秋幸はそこから逃がれるために再び神聖な山へと入ろうとする。なぜなら『枯木灘』において、帰属の場を持たず宙づり状態にあった秋幸に安心をもたらした空間である山中で再び過ごしたい意思が強かったからだと言えるだろう。

一 i 聖なる六さんと俗化した秋幸

そのような折、秋幸は利潤を求めず、日のある限り働く六さんという人物の話を書く。この六さんこそが秋幸が求めている聖なる存在なのだ。そこで、秋幸は山へ入り、六さんが「単純な休みもしないで働く姿を見ていると、なにもかもが余計なわずらわしい事に見えて」き、六さん「の元に居れるだけ居させてもらおうと決めた」のだった。六さんの小屋に入る前に、秋幸は服ごと水に入って行く。これは、殺人を犯した身で神聖なる六さんの小屋を穢さないための浄めの儀式だったのだらう。六さんと酒を酌み交わしながら、秋幸はここまで至った経緯を話すのだが、これは「神様」と言われるほどの聖なる人物に罪を告白する秋幸の懺悔と捉えられないだらうか。罪を懺悔することで秋幸は聖なる山に居続けることを許されたかったのだらう。だがしかし、六さんが自らの力で治癒できないほどの傷を負ってしまうことにより、秋幸は新宮へ出ることを余儀なくされる。六さんがケガをした要因それは、俗化した秋幸が六さんの神聖な場へ乗り込んでいったことによつて、神聖な空間の均衡が崩れてしまったからだらう。ここから、秋幸が神聖な空間から拒絶された人間となつてしまつたと考えられる。

一 ii 神聖なる「土方」の消滅

新宮に戻つた秋幸は、他所から流れてきた金儲けのために土方仕事に従ずる労務者を目にする。その中で仕事についていけなくなつた者が、「消しゴムで消したようにきれいになつてしまつた」「路地跡」を根城としている。秋幸にとつての聖なる空間であり、戻る場でもある「路地」は消され、その跡は穢されてしまつた。さらに、『枯木灘』において自然との交接を感じられる聖なる作業だつた土方も利潤を追求するだけの労働に墮してしまつた。このような土方は、秋幸が求める仕事ではないため、それを捨て、実父・浜村龍造が行っている材

木商を選ぶ。だが、材木商がいくら山中で仕事を行えると言つても、材木商も自然に逆らう利潤だけで動く商売であり、現在の土方と何ら変わらせず、快樂を味わうことは不可能である。にも関わらず、秋幸が俗な材木商を選んだ理由は、兄・郁男が成し得なかつた弟殺しを果たし、兄を超えた秋幸にとつて、次に超えなくてはならない存在が父であつたからだろう。また神聖な空間から拒絶されたことも、俗な山仕事へと転向させ、秋幸を「父殺し」へと導いたのではないだろうか。そこから鑑みると、龍造の元へと秋幸を向かわせた六さんのケガは、母系から父系へ、土方から材木商へと移行する方違えの効果も担っていたのだ。

## 二、「影」を見つけた秋幸

『地の果て』では「影」の描写が『岬』『枯木灘』よりも圧倒的に多いことから、この「影」には、特別な意味が込められていると考える。それは、ユングが唱えた「影はその主体が自分自身について認めることを拒否しているが、それでも直接または間接に自分の上に押しつけられてくるすべてのことが人格化したもの」という自分の表面に出ているものと違う性質を指す「影（シャドー）」であろう。スサノオが悪事を繰り返したことで、より強い悪を身に付け、八岐大蛇を退治できるまでに至つたように、秋幸も近親相姦や異母弟殺害という禁忌を犯したことにより、邪悪な力を徐々に自身の内面にため込んでいった。その力こそ秋幸がこれまで無意識の裡に認めることを拒否していた自己、つまり「影（シャドー）」だったのだ。ここで、作品冒頭を確認したい。

朝の光が濃い影をつくつていた。影の先がいましたが降り立ったばかりの駅を囲う鉄柵にかかつていた。

体と共に影が動くのを見て、胸をつかれたように顔を上げた。

(二頁)

この作品を秋幸ではなく「影」として描き始めることは、秋幸の内面に隠されていた「影（シャドー）」＝邪悪な力が姿を現したと読者に提示する。

そして本作は、「影」を手に入れた秋幸が、これまで犯した禁忌の終着点として「父殺し」を果たすために龍造に挑む姿が描かれる。従来、「地の果て」での龍造は、秀雄が殺されてからのこの三年の間にメタレベルから秋幸のレベルまで降りてきたと言われているが、果たしてそうであろうか。

初めて秋幸が龍造の元を訪れた時、龍造は秋幸に「わしのはなにもかも秋幸のものじゃ。土地も財産もこの浜村龍造さえ秋幸のもんじゃ。」と言いながら、うれしくてたまらないように体をゆすって笑い、長年手に入れたとも叶わなかった秋幸が手に入った嬉しさを体現している。そしてこの時、自分のものは全て秋幸のものだと言うことによつて、一見、龍造が秋幸の秀雄殺害の罪を許し、さらに秋幸のレベルへと降りたかのように見せたのだろう。だがしかし、龍造は妻と娘を秋幸に対面させ、龍造は「どうじゃ、針のムシロに坐つとる具合じゃろ」「そのくらしいの針がなんじゃ」と言つ。ここで子、又は弟を殺された二人の女の、無言の怒りと恐怖の視線を秋幸は見せつけられたに違いない。彼女らが秀雄殺害を許していないように、龍造もまたその罪を許していないのだ。そのため、秋幸が「針のムシロに坐」らされている感覚を憶えるのは容易に想像できる。ここで龍造が秋幸に言わんとしていることは、「そのくらしいの針がなんじゃ」に含蓄された、「路地」の者らから「蠅の糞」と噂され続けるという屈辱、さらには、一時は秋幸との親和的關係を持てたことをフサによつて隠蔽され、嘘の噂を我が子に吹き込まれたことに、長年、耐え続けてきた自分とは比べものにならないということだ。後者に関し

てこの時点では秋幸は気が付いていない。だが、これも含め龍造の秋幸に対する挑発といえる。龍造に挑む秋幸は、

「龍造よ」とまるで浜村龍造が秋幸の息子だというように呼んだ。浜村龍造が邪意のない子供のよような笑みを浮かべるのを見て、「刑務所の中で浜村孫一が何遍も夢枕に立つんじや」と思いつきを言った。

「秋幸、おまえこそおれの現し身じや、龍造はおまえの子供じや、と御祖先様が言っんで、おれが阿呆ぬかせとどなると、孫一のやつは何十代もの血の流れで一代ぐらい逆さまになつてもかまうものかと言っんじや」  
 浜村龍造は眼をまるくしておどけ、秋幸が歩いて陳列ケースの中から銃床の朽ちた鉄錆だらけのがらくた同然の火縄銃をつかみだし、ふりかえりもせず玄関の方へと歩くと「おまえはなにもかも俺から取り上げる」とはしゃいだ口調でいつ。

(二六頁)

と傍線部にあるように、秋幸は龍造の挑発に乗りながら、たとえ「がらくた同然」であつても龍造が成り上がるまでの苦悩と屈辱が籠もつた火縄銃を目の前で奪い、来歴の拠り所として造り上げた遠つ祖・孫一を秋幸は略奪する。この一連の行動から、秋幸は龍造を失意の底へ落とそうとしていると捉えられる。それにも関わらず、龍造がはしゃぐ理由は『枯木灘』の最後での「秋幸は買いだ」という思惑通りに闘つに相応しい邪悪な感情を、秋幸の中に確認できたからである。この時、秋幸と龍造の決闘が始まったのだ。だが、同時に秋幸に全てを奪われる危惧も抱いていたと考えられる。でも何より秋幸を自身の手元に置くという二十九年間待ち望んだ夢が叶つたことに龍造ははしゃいでいるのだらう。ところで、龍造はフサに対し「秋幸さんはわしの子じやない。わしの

親じゃ」と秋幸の言葉を借り、自ら秋幸との立場の反転を敢えて言う。この反転により、邪悪な存在に成長した秋幸の言いなりになり、龍造は全てを取られたかのように見せた。だが、これは秋幸の言葉を巧みに利用することによって、秋幸を懐にしたことを表明している。換言すれば、「一代ぐらい逆さまになつてもかまうものか」という秋幸がとつさに思い付きでいつた言葉が、彼の心理を捕らえたのだ。すなわち、絶対悪とされた龍造がメタレベルから秋幸のレベルまで落ちたのではなく、異母弟殺害によつて邪悪な力を獲得した秋幸が龍造と闘うに相応しいレベルへと昇り詰めたのである。では、秋幸はいかようにして龍造と闘うのだろうか。

### 三、 龍造を追い詰める秋幸

龍造が子どもの頃に暮らしていたジジの小屋に秋幸が寝泊まりすることにより、ジジの小屋とジジを龍造から奪つたと読み取ることが可能だ。抛り所を奪われた龍造が秋幸にどのように接するか、確認していく。

浜村龍造は不思議な笑いをつくり、「夢じゃなしに、六か、六らの仲間が秋幸の顔を見に来たんじゃら」と言い、「秋幸は孫一じゃさか、あれらが顔ぐらいおがんどつてもバチは当たらん」と独りこちるように言うて足音を消した素早さで停めたライトバンに歩く。

(一八一頁)

龍造は秋幸が孫一だと独りこちるように言うことで、自らにそれを言い聞かせている。初めこそ、自らと闘うに相応しい男に秋幸がなつたと喜んでいて龍造であったが、この様は、秋幸に孫一を奪われるのを怖れていると捉

えてもよいだろう。

「(略) おまえが秀雄を殺したんじゃが、わしはフサが俺の子を殺したんじゃと思とる。本当に秋幸が殺すんじやったらこの俺じゃ」浜村龍造は昔の癖を思い出したようにちつと音をさせて唾を吐いた。

「浜村孫一が浜村龍造をか？」秋幸が言つと浜村龍造は声を立てて笑つた。

(一八三頁)

この場面も秋幸に対する龍造の挑発である。先に引用した龍造の「秋幸は孫一じゃさか」という言葉を利用し、秋幸は自身を浜村孫一と言つたのだから。だが、孫一を秋幸に奪われたくないため、彼の巧みな返しに笑つことのできないほど、龍造は追い詰められて来ているのだ。だが、秋幸が「路地」がつけ火された夢に体の大きな男が出てきたと言つと、龍造は次のような態度をとる。

(龍造は…佐藤注)へつと小馬鹿にした顔をつくり、「また俺じゃと言んか、体の大つきな男というのは他にもある。おまえじゃろ」と言つ。浜村龍造は秋幸の顔に浮かんだ一瞬の狼狽を見て嬉しくてたまらないように「この孫一殿はまだ昔のタネの時代の事を言つてくれる。まだ芽も出さんタネの孫一殿じゃ」と言つ。「タネ殿はわかつてくれんのじゃ。負けたら負けた状態ととまつたら一統が亡びるじゃのに。路地を見た事あるかい？路地を歩き廻つた事あるかい？」「違つんじゃ」秋幸は言おうとした言葉を浜村龍造がわざと曲解していると思ひ腹立たしくさえなつて手を上げ言葉を遮つた。浜村龍造が黙るのを見て、わざと人を挑発していると思ひ、秋幸は「その男は確かに俺じやつたんじゃ」と昂ぶつた声で言つた。秋幸はわざと声を



落とし、意識せずとも似ている声で浜村龍造そっくりに、「わしは刑務所から戻ってこの足で路地の土の上歩き廻つての、泣いたんじゃ」と言った。「わしはその時、何にでもなれると思たんじゃ。(…中略…) わしは孫一にもなれると思たんじゃ」  
(一八五・六頁)

龍造はこの時、秋幸が「路地」の者らと同様の認識内に留まっていることを再確認したはずだ。そのため、傍線部にあるように龍造は身体的特徴の類似から秋幸との交換性を引き合いに出す。しかし、秋幸は龍造の迷惑の真意に気づき、そして、互いの交換性を利用し、「孫一にもなれる」と龍造の声色をまねることによって、挑発しようとしていることが伺える。この直後、龍造は秋幸に対して次のように思うのだ。

それが嘘でありたつた今思いついた事だろうと察しながら、秋幸の本当を見たというように見ていた。浜村龍造はひとかたならぬ衝撃を受けていた。(…中略…) 秋幸が、ぬけぬけと自分が積み重ねてきた事を簡単に、冗談のように横取りしてしまう。簡単に嘲い物にもしてしまえる。浜村龍造は秋幸を見つめたまま、浜村孫一の石碑を建てたのも、織田信長に破れ仏の浄土を求めて有馬へ降りたという伝承の土地を買いしめたのも、血にこだわり秋幸にこだわったのも自分だと思い、「兄やんはわしを脅しとるんじやの」とつぶやいた。  
(一八六頁)

「秋幸の本当を見た」とあるように、秋幸の邪悪な面である「影(シャドー)」によって、脅されていると龍造が確信を持つほど、「父殺し」を果たせるまでに至った秋幸の中に潜む邪悪な面は、大きくなってきた。そして、

造り上げた過去を秋幸に横取りされた龍造のつぶやく姿からは、秋幸に対する敗北感が垣間見られる。この後、意に反する行動を取る秋幸に対して不平を言えなくなった龍造が描かれることから、この時既に、龍造は秋幸に逆らえなくなり始めているのだ。

#### 四、秋幸の成功する「父殺し」

四 i 秋幸を「父殺し」へと向かわせる「水の信心」

ところで、「新宮」では土地改造と時を同じくして、「水の信心」という新興宗教が老婆らの間に蔓延する。その上、異母妹・さと子までもが熱心な信者となってしまった。「水の信心」では、水を飲むことによって体の穢れが体毒が消えると言われている。その体毒をさと子は、パンパンをしていた時の性交によって生じたと考えている。にも関わらず、秋幸は体毒の原因を次のように考える。

秋幸はさと子には何一つ罪がないのだと心の中でつぶやいた。(…中略…) 別々の腹に生れた同じ父を持つ子が姦した事が罪ならさと子にはなく男である秋幸にある。それなのに、さと子は自分が穢れていると水の信心をはじめた。(…中略…) さと子のぬぐい去ろうとした穢れの記憶がそうしたので、罪になるならむしろ秋幸に廻ってくるものだ(以下略)

(二七六頁)

このように、秋幸はさと子の体毒は自分との近親相姦によって生じたと考える。そして、『岬』に描かれている

よつに近親相姦によつて龍造を凌辱しようとした自分自身こそが穢れ体毒を孕むべきだと思つ。なぜなら、あの時さと子は秋幸が異母兄であることや彼が性行為に至つた想いを知らなかつたからだ。『枯木灘』で秋幸とさと子が近親相姦を龍造に告白した際、龍造はうるたえも怒りもせず、笑つた。この龍造の態度を思い出した秋幸はさらなる怒りを生み出した。その上、「水の信心」に頼らざるを得ないさと子を知つた時、秋幸の中では更に「父殺し」に対する想いが強くなつたと言えよう。そして、龍造から逃げるためにさと子が養護院に入つていた過去を知つたことを契機に、「あれを殺す」と秋幸は「父殺し」を宣言する。

#### 四 ii シシ狩りという「父殺し」の象徴

それを聞いていたかのように龍造はシシ狩りへ秋幸を誘い、「兄やんの下手くそな鉄砲の流れ弾に当るかもしれんが、兄やんとじゃつたらシシ追つて野山走り廻つても面白いと思つ」と言いつつも「流れ弾じゃないかもしれんが」と秋幸に自分を撃つとそそのかす。そして、「龍造は秋幸の動揺を見透かしたように笑」い挑発した。その上、秋幸の「父殺し」の方法に気づいているかのような次の言葉を述べたのである。

「こんな弾、逃げていくシシに撃ち込んで殺して喜ぶより、昔やつたよつに犬をけしかけて犬に仕とめさせた方が面白いけどの。アキユキじゃつたら追い込んで足に喰いついて筋を噛み切つて動けんよつにするんじゃろつけど。弾一発で殺すの味気ないと思つんじや」

（四一九頁）

この「アキユキ」とは警官が飼っている犬のことだ。また、秋幸が刑務所に入っている間に竹原の家では、「ア

キユキ」という綽名の付いた犬を飼い始めていることから、この犬は不在の秋幸の代理と捉えられないだろうか。さらには、作中に描かれる犬に「アキユキ」という名が与えられていることを併せて考えると、犬は秋幸を示す記号と考えられる。このシシを追い詰め弱らせ、抵抗出来なくさせる殺害方法こそが、秋幸が成さんとする理想の「父殺し」である。よって、シシ狩りは「父殺し」の象徴と言えるのだ。

シシ狩りの場面を見る。秋幸は刑務所から龍造の元に来たのは、償いではなく勝利者が略奪するようなものだと思う。兄、弟と順々に殺してきた秋幸の次なるターゲットは紛れもなく父だ。徐々に龍造との距離を埋めていった秋幸は、「俺の獲物はあいつだ、俺の父親だ」と「自然な気持ちで浜村龍造を父と呼べることに気づく」。そして息子・秋幸の猟銃は父・龍造に照準を合わせた。「龍造は気配に気づいたように振りかえり、一瞬、驚き、顔が固くこわばり」、「十ほど数える間、浜村龍造は立ちすくんだのだ。だが、秋幸は引き金を引かない。それは、猟銃で「父殺し」を行うことは、安易な方法であるからだ。邪悪な存在として成長した秋幸にとって「父殺し」は、道具に頼ることなく、徐々に死の淵へと龍造を追いやり殺さないと何の意味も持たないと考えているはずだ。そのため、この場面では、龍造を猟銃の照準に収めるに終わったのである。この時、「わしは龍さんをシシと間違えるし、友一はわしをシシと間違えて撃ちかかると言っていた龍造ならば、ここで軽口をたたいてもよかったです。ただ、何も言わない。かつて、佐倉を間違えて撃ちかけたと言っていた龍造ならば、ここで軽口をたたいてもよかったです。ではないか。だが、何も言えない龍造の様から秋幸に抗えなくなつたとこの箇所から読み取れるのだ。そして、シシ狩りの翌朝、龍造は自殺する。夜明け前、秋幸は龍造の書斎に「大きな黒々とした影」が立っているのを見る。その「影がくつきりと全貌を見せることはない」、そして「影は秋幸に向い合うように立ち、首を吊つたのだ。この場面において、龍造はなぜ「影」と描かれる必要があつたのか。それは、霸王と僭称して

いた龍造が、秋幸に抛り所を全て奪われたことにより、内実を全て失い、がらんどんな「影」のみの存在になつてしまつたからだ。そして、内実のない「影」となつた龍造には死しか残されていない。そのため、「初めて秋幸は影がそこにたたずんでいる意味も、立つた物音の意味も分つた。息が一瞬つまり、体が疑いと驚きで裂ける気がしたが、秋幸にはそれがまた、有馬の小屋を早く出た時から察知していた自明の事だつたような気がしたのだ。既に、秋幸の物語に必要ななくなつたその「影」に声を掛けるか否か錯乱し、ようやく発した言葉はこの一つの言葉しか知らないように叫んだ「違つ」だつた。だが、この言葉は自殺してはいけないという意味ではない。自らの抛り所を次々と奪われ精神的に追い詰められ、秋幸に対する抗う力を失つた龍造は、自殺の道を選んだのである。つまり、龍造は敗北を認めるために死ぬべくして死んだのだ。

ではなぜ龍造が首を吊つた瞬間秋幸は「違つ」と叫んだのか。渡部直己は、

何が「違つ」のか。問題は明らかに「ヨシ兄（龍造の朋輩：佐藤注）と浜村龍造が摩り変わり、どこかで鉄男と秋幸の役割が摩り変わった」という「役割」

と、この時秋幸と龍造の親子、鉄男とヨシ兄の親子の「役割」が入れ替わり、後者によつて龍造の自殺前夜に「父殺し」を成されてしまつたことに今気づいたと論じている。しかし、確認してきたように、秋幸は精神面から龍造を追い詰め、間接的に殺したため、「父殺し」は成し遂げられているのだ。すなわち、「違つ」の意味は、二十年前に「路地」の権利が龍造に渡つたことを知つた今、その真実を明らかにしてから龍造に死んでもらいたかつたという意味だろう。

ここで、「父殺し」<sup>(4)</sup> についての中上の発言を見ていく。小島信夫との対談の中で中上は、

他の終わり方（龍造の自殺以外…佐藤注）も考えてみましたが、結局あれ（龍造の自殺…佐藤注）以外にないと思いました。<sup>(4)</sup>

と述べている。さらに、中上は龍造の自殺について柄谷行人に次のように言ったと柄谷は川村三郎との対談で述べている。その内容とは、

あれは途中までは父親を殺すつもりだったらしいんです。それが途中で殺せないということになって、自殺することになった。<sup>(5)</sup>

というものだ。中上のこれらの発言は、秋幸が龍造に直接手を掛けるか、それとも間接的に殺すか、どちらかを考えていたということではないだろうか。そして、最終的に選んだ龍造の終わり方が、自殺であっただけなのだ。龍造の死を描いている時点で、「父殺し」は成立している。なぜなら、龍造への殺意を前提にした作品内には秋幸の龍造に対する殺意が先に見てきたように散りばめられているからだ。その上、「秋幸は自分がその浜村龍造の息の根を止めた張本人だと思った」、「親を殺してしまったと言葉が浮いて出た。兄も殺したし、弟も殺してしまった」と描いている。この描写から、龍造の自殺は秋幸が導いたと言えるのではないだろうか。さらに、秋幸の神話的英雄の成長譚のもとにこの作品が成立していることを念頭に置いて読むと、邪悪な力を獲得した秋幸が、

順々に龍造の拠り所を奪ったため、明らかに「父殺し」は成功したと言える。

ではここで、「父殺し」について述べている先行論を見ていく。柄谷行人は、

ここでは、浜村龍造は、秋幸の父としてあらわれるのではない。彼は「秋幸さんはわしの子じゃない。わしの親じゃ」とフサにいう。秋幸もまた、一面でそれに合意している。

すなわち、幾度も父殺しが暗示されているにもかかわらず、その「父」は、ほとんど最初から「息子」の子としてあらわれている。いいかえれば、最初から、メタレベルが対象レベルに降りてきている。すでに父殺しは不可能なのである。<sup>6)</sup>

と論じている。だが、父と子の反転により、龍造がメタレベルから秋幸のレベルに降りてきているため、「父殺し」が不可能になるという論は納得しがたい。まず、フサに龍造が言った親子の反転は龍造の秋幸に対する挑発だ。秋幸もまた、自身が孫一であるかのように見せ、龍造から孫一を奪い、龍造を追い詰める場面に互いの反転を口にする。つまり、父と子の反転は互いの立場を入れ替わらせるのではなく、互いの心理に働き掛ける方法だったのだ。そのため、父と子の反転は起こっていないのである。そして、このように秋幸を挑発し続けることが可能な龍造はメタレベルに居続けている。そこに禁忌を犯すことで邪悪な力を付けた秋幸が、龍造のレベルまで成長していったため「父殺し」は可能となったのである。続いて、絳秀美は、

「父殺し」「王殺し」への衝動は、ここではもはや何ものにも代理されることなく秋幸を支配し、その内面を

揺すぶっている。しかし、秋幸自身が「父殺し」を行うことはない。浜村龍造は首を吊って自殺し、それの前にして「違つ」とつぶやくのみである。この作品で行われる唯一のそれは、龍造の古くからの「朋輩」であつたヨシ兄が実子の鉄男に殺されることだが、それが秋幸の「父殺し」の代理表象になりえぬことは、「今、はつきりと路地は消える」と秋幸が思うところにも明かだろう。「路地」とは、まず何よりも、さまざまな代理表象が「父殺し」の主題へと組織され、絞り上げられていく物語空間であつた（はずだ）が、秋幸自身は「父殺し」を遂行できず、路地から去っていくほかないからである。

と論じている。龍造の自殺により秋幸が「父殺し」を行っていないとする見解は、龍造の自殺のみに焦点を当て「父殺し」を見ている証拠ではないだろうか。本作品を理解するためには、ここに至るまでの秋幸の行動と龍造との関わりを見て、龍造の自殺と「父殺し」について判断しなければならぬ。龍造の元を初めて訪れたときから、秋幸は龍造の苦悩と屈辱の証である火縄銃を奪い、その後も孫一やジジ、そしてジジの小屋、さらには秀雄（「枯木灘」での殺害だが）など龍造が抛り所としているものを次々と略奪し、精神的に死の淵へと追い詰めていった。なぜなら、龍造を亡き者にする想いを遠い日に刻みつけられた願望のように抱いていることに気づいている秋幸が、一貫して「父殺し」を果たすために行動を起こしていると言えるからだ。この遠い日について作品冒頭で次のように描かれている。

いまから思えば何もかもすべて始まってしまっていた。秋幸は腹違いの弟、実父浜村龍造の二男秀雄を、それがまた終わりでもあり石を打ちつけてこじあけた新たな始まりのようになぐり殺した。

（六頁）



遠い日とは秀雄殺害以前とわかる。秋幸は密かに龍造殺害の願望を抱き続けていたのであろう。そしてそれが、秀雄殺害時に秋幸の意識の前面に表出したと考えられる。

また、本作品の語り手の一人であるモンが、龍造の死と過去に秋幸が告げられた予言を思い出し、

オリウノオバが秋幸の顔を見て透視した運命はすでに取りかえしが効かない状態で起こっていた。だが、まだ小さな芽の状態だった。それから子供の頃から癩症の美恵は気がふれた。秋幸はさと子を姦した。弟の秀雄を石で打ち殺した。実の父親の龍造を殺した。いま秋幸の中で運命の芽は育ち枝葉を広げている。

(四七六頁)

とまっていることから、秋幸以外の人物も秋幸の「父殺し」を認めている。だが、モンは全知全能の語り手ではないため、モンの想像が誤っている可能性は否定できない。なぜなら、秋幸と龍造が山へ入った時、モンは二人が山へは行かず、有馬の浜村衆と会っていたと想像するなど事実と食い違う場面があるからだ。そこから考えると、秋幸の「父殺し」の成功は、信憑性に欠ける。だが、「路地」のことなら何でも知っていた人智を越えたオリウノオバの名を出すことによって、このモンの考えが真実であると言っていると読み取れる。そこでこのモンの想像からも「父殺し」は成功したと言えるのだ。

## 五、邪悪な存在となったことを認めた秋幸

「父殺し」を成し得た秋幸は、「光が闇の中の影を見つめたままのような秋幸の眼から体の中に入り込む」感覚を憶える。この「闇の中の影」とは、これまで秋幸の心の奥底という闇の中に潜んでいた自身の「影（シャドウ）」に光が当たり、その邪悪な自我が、漸く明るみに出たのである。この後、山中の溪流で水を飲む秋幸は、水面に映った自分の「影」を見る。この水に映る「影」を見る行為こそ、ユングが『元型論』の中で述べた「水の鏡を覗きこむ者は、なによりもまず自分自身の姿を見る。自分自身に向かつていく者は自分自身と出会う危険を冒すことではないだろうか。秋幸は、「父殺し」を果たしたことにより、自分自身の内に潜んでいた邪悪な存在と出会う危険に立ち向かえるまで成長し、真の霸王・秋幸が誕生したのである。

だが最後、秋幸は「死んでこそ絶対の勝利だ。死こそ輝かしい名譽だ」と「浜村龍造はヨシ兄をはげますように独りごちる」はずだとヨシ兄の臨終の床で想像する。これは、男手一つで育て、溺愛していた息子に裏切られ、撃たれたヨシ兄に、息子に執着するのではなく、朋輩である俺に付いて来いと思うはずだと想像してのことだろう。仮に、死が勝利であるならば、秋幸が聞きたかった「路地」についての真相を語らず闇に葬り、自殺前夜に書類（佐倉から奪った「路地」の土地の権利書か）を片付けていたことから、生きていれば秋幸に様々な真実を訊ねられ、自身の中にひた隠しにしてきた物を明るみにしなければならぬはずだ。しかし、死によって、真実を葬り去り、沈黙は守られ、これ以上何も奪われることがないと捉えてもよいだろう。そのため、死が勝利であると思うと想像したと考えられないだろうか。一般論として、物理的な「父殺し」を行うならば自らの手で命を

絶った者の勝利で終わる。だが、秋幸が成さんとする「父殺し」はこのような誰しもが考える安易な方法ではなく、龍造の抛り所を奪い、精神的に追い詰める手法であった。よって、奪われる物を全て失った龍造はがらんどうな存在となつたのだ。仮に自死しなくとも彼は、生きる屍のような存在になつていたのである。つまり、彼の抛り所を全て奪つた時点で秋幸は「父殺し」を果たしたのである。

龍造の死によつて秋幸は龍造が僭称していた霸王の座を奪い、真の霸王となつた。これまで彼を守つてくれた温かい空気で包まれていた「路地」は、差別され、また「路地」の秩序に染まらない者を排除し差別していた真実を秋幸は龍造の元に行つたことで知つた。さらにはこの「路地」の秩序によつて、龍造と一時は親和的空間を持つたことまで母・フサに秋幸は隠されていた。このように二十九年間自らを欺き続けた悪しき「路地」を浄化するために、霸王・秋幸は業火を放つたのだ。<sup>8)</sup>

### おわりに

最後に、本稿で明かにし得た神話的英雄としての 秋幸サーガ の構造を提示しておく。神話的英雄である秋幸は、近親相姦や異母弟殺害という試練を乗り越えつつ、自己を確固たるものとし、最後の通過儀礼である「父殺し」の段階まで昇り詰めた。秋幸を挑発し続け自らを殺すようそのかす龍造は依然として、秋幸にとつて闘い甲斐のある人物だ。異母弟殺害によつて邪悪な力を開花させた秋幸は、龍造の抛り所を次々に奪い、精神的に追い詰めていく。シシ狩りの場面で素直に龍造を父と呼べることに気づいた秋幸にとつて、銃を使い一発で殺すという安易な「父殺し」は望むところではない。本文に叙述されている龍造の自殺は、彼の抛り所とするものを

順々に奪われ、がらんどつとなり、精神的に追い詰められた結果であり、従って秋幸の「父殺し」は成功したと言える。秋幸は「父殺し」を果たしたことにより「影（シャドー）」を統合し、邪悪な部分も含めて真の自己を確立でき、さらに、真の霸王となった。この霸王・秋幸は自らを欺き続けた悪しき「路地」を彼の業火で浄化したのである。また、これはカグツチがイザナミを焼き殺したように、秋幸が母なる「路地」を滅ぼしたとも言えるだろう。つまり、「地の果て」はクライマックスにおいて「母殺し」までもが描かれているため、「父殺し」と「母殺し」の物語だったのだ。

中上が死の直前にもう一度秋幸を描きたいと言ったことから、秋幸は浜村孫一が仏の国を造ろうとしたように新天地で国々共同体を造るのかもしれない。<sup>3)</sup>かくして、神話的英雄の成長譚としての「秋幸サーガ」は円環を閉じたのである。

## 注

(1) 『奇蹟』は中本の一統を描いた作品のため、表立って秋幸が描かれることはなく、「イクオ外伝」に脇役として登場するだけだ。だが、この中本の一統を描いた作品群に秋幸が組み込まれる。謂わば、中本の一統の作品群と秋幸の作品群を繋げ、中上ワールドを創り上げる要素を孕んだ重要作品であるため、「秋幸サーガ」に『奇蹟』を含める。

(2) 『岬』『枯木灘』における秋幸の自己の確立、三つの家に属するという宙つりの状態からの解放という神話的英雄として成長していく秋幸の考察については、拙稿「中上健次『岬』 秋幸が自己を確立するまで」(『中京大学文学会論叢』第一号、二〇一五年)、「中上健次『枯木灘』 秋幸の存在不安」(『中京大学文学会論叢』第二号、二〇一六年)を参照されたい。

- (3) 渡部直己「路地の秋幸」、日本近代文学と差別、太田出版、一九九四年
- (4) 中上健次・小島信夫「血と風土の根源を照らす」、地の果て 至上の時 付録 新潮社、一九八三年
- (5) 柄谷行人・川村三郎「中上健次・時代と文学」、群像、一九九二年十月
- (6) 柄谷行人「解説」、地の果て 至上の時、新潮社文庫、一九九三年
- (7) 結秀美「解説」「父殺し」の逆説、中上健次選集10 地の果て 至上の時、小学館、二〇〇〇年
- 「父殺し」については、辻原登も「地の果て 至上の時」をめぐる十一のフロポ（「地の果て 至上の時」、講談社文芸文庫、二〇一二年）の中で、「この物語は、父の勝利で終わる。」「浜村龍造は暗闇の書齋で、唐突に秋幸の目の前で首を吊る。息子の父親殺しの願望はこうして父親に先を越され、頓挫する。」と述べている。
- また、中上が上野千鶴子との対談「暴力と性、死とユートピア」（火まつり、山口昌男編、リプロボート、一九八五年）で龍造の死について、魔女ランダの例を挙げ、龍造が母のふりをしているとし、そのため「父殺し」は不可能だと述べている。だが、エッセイ「南の記憶」（「すばる」一九八四年十一月）の中で魔女ランダについて述べた際に、「たまたま分かり易い例として『地の果て 至上の時』を使っているだけで、他意はない」としている。つまり、南方と「路地」という母系社会の共通項を見出した中上は上野との対談で、「地の果て」に触れ「父殺し」の失敗としたのだろう。つまりこれは作品執筆時に中上は考えていなかった可能性が大きい。
- (8) 「路地」は、外部から差別されていた。だが、同時に「路地」の秩序に染まらない者に対してもまた、自分たちの空間を守るために差別を再生産していた。たとえそれが不当な差別であっても、それを正当化しなくてはならない罪悪感を抱きながらも暮らさざるを得なかったのだ。これが「路地」の真の姿である。秋幸はこれを龍造の元へ行ったことで知った。つまり、これまで自らを温かく守ってきた空気の中には、再差別をしなくてはならないという後ろめたさも含まれていたはずだ。この空気に秋幸は二十九年間欺かれていたのだ。
- 「路地」の真の姿については紙幅の都合上、別稿に譲りたい。

(9) 拙稿「中上健次『枯木灘』 「紀子」という名から見る 秋幸サーガの構造」、『牛王』第十号、熊野大学、二〇一六年

引用本文は『地の果て 至上の時』（書き下ろし、新潮社、一九八三年）に拠る。  
なお、引用本文中の傍線は佐藤が付した。